



ショートコメント

★★★★

おまへの親になったるで (テレビ大阪 ドキュメンタリー映画)

2023 年／日本映画
配給：／94 分

2024 (令和 6) 年 3 月 2 日鑑賞

第七藝術劇場

Data 2024-23

監督：北岸良枝

撮影・編集：テーク・ワン

プロデューサー：山田龍也

(テレビ大阪)／花本

憲一 (テレビ大阪)

ナレーター：竹房敦司

👁️👁️ みどころ

何とも強烈な大阪弁のタイトルだが、こりゃ一体何の映画？それを理解するためには、まずは「日本財団職親プロジェクト」の勉強から！こんな発想は、まさに大阪特有のものだろう。

本作の主人公・草刈健太郎氏がこのプロジェクトに参加したのは一体なぜ？彼の妹さんはなぜ夫に殺されたの？その犯人は今アメリカで服役していたが、“仮釈放”の報に接すると、草刈さんは・・・？

「袴田事件」の再審請求も大変な問題だが、本作からも“人間の業（サガ）”のあり方をしっかり学びたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

◆本作のチラシには、「なんで・・・『妹』を殺害された俺が」「反省はひとりでもできるが、更生は一人ではできないー」「前代未聞！刑務所・少年院で先行上映。」の文字が躍っている。

◆そして、本作のストーリーについては次のとおり紹介されている。すなわち、

妹を殺害された兄の「葛藤の 10 年」

自分の家族を殺した犯人を許せますか？

親からも、社会からも見捨てられた「元犯罪者」に温かい手を差し伸べられますか？

「なんで・・・俺が犯罪者の面倒を見なあかんねん！」

しかし、男は差し伸べ続けている。

つかんだその手を離さない。

—— そのわけとは ——

ふたつの問題と向き合い、自問自答しながら生きる・・・

加害者と被害者の間で闘ってきた、男性の 10 年間に密着したドキュメンタリー

10 年前、関西の中小企業 7 社が集まり、あるプロジェクトが発足した。
元受刑者に住まいや仕事を提供し、再犯を防ぐ「日本財団職親プロジェクト」。
受刑者の半分が出所しても仕事や居場所がなく、再び罪を犯していた社会問題に立ち上
がったのだ。

しかし、参加者の中にひとり複雑な思いを抱えた男がいた。

大阪の建設会社・社長の草刈健太郎さん・・・

大切な妹を殺された悲しい過去があった。

元受刑者を相手に、冷静な気持ちでいられるのか？

当初、活動に気が進まなかった草刈さん。

少年院を出たある青年との出会いをきっかけに、のめり込むように全国各地の刑務所・
少年院を訪問し、多くの元受刑者らに手を差し伸べてきた。

窃盗・薬物・詐欺など再び、犯罪に手を染める者たち・・・

草刈さんは親のように見守り続ける、「心を鬼に、仏にしてい」

◆本作は、テレビ大阪ドキュメンタリー映画だが、そのドキュメンタリー映画を監督した
北岸良枝氏は私の知人の関係者だったため、本作を紹介され、十三にある第七芸術劇場ま
で赴くことに。近時、袴田事件の再審請求を巡ってテレビ放映されたドキュメンタリー番
組を観たが、この手の映画は、どう見てもどうにも重くなってしまうもの。それは仕方が
ないが、さて、本作は？

◆そう思って興味深く、満席の中で鑑賞したが、なかなかよくできていた。ただし、弁護
士の私は次の 2 点が気になった。

その第 1 は、本作は草刈健太郎氏が、アメリカで服役中のチェイスの仮釈放の情報を得
たところからストーリーが始まるため、チェイスの殺人事件の裁判に関する情報が全く描
かれていないことだ。そのため、チェイスの仮釈放を巡って、彼の殺人の動機についての
説明や謝罪の有無が問題提起されるが、本来それは裁判の場で何らかの結論が得られてい
たはずなのでは・・・？

第 2 は、アメリカの仮釈放の制度がどう構築されているのか、またそれは日本の仮釈放
の制度とどんな異同があるのか等について、明確な説明がされないことだ。

この 2 点は、本作の出来に直接影響するものではないが、あくまで弁護士の私が気にな
ったという意味で指摘しておきたい。

2024（令和 6）年 3 月 14 日記